

人の子ををしふる人も罪を犯し捕はるゝまで
すさびたる世か

東京市視學小學校長等の瀆職事件

犯罪者中大學卒業者少からず學校教育の缺陷
を思ふ

學生をかへり見ず大學の某教授會社に轉勤す
給料多きに

道德のそはぬ知識は邪知なりといひて昔は忌
みつるものを

偏智教育

今時の文屋の博士のはかなしや西と東とわき
まへもなし

おのが國のよき事さへもわきまへぬ醜の物識
何いひさわぐ

京大の瀧川事件三首

事毎に異國真似てかしこぶるえせものしりい
何か物言ふ

國の爲よからぬ事も大學の教授は述ぶる自由
ありといふ

人寄れば軋轢ありと身をもちて大學教授は學
生に教へぬ

東大經濟部の紛争

生硬の新語用ゐて今めかすこの人我が國の文
相なりけり

外つ國の言葉まねびて誇るなりむしろ耻とも
おもひ知らずて

外國語につきて四首

外つ國の言葉真似ぶは弱き國愚かなる國貧し
かる國

ことさへぐ唐國人にわが國の言葉教へむ時を
こそ待て

外つ國の言葉たくみにあやつるは召し使はる
るはしためにして

歐米崇拜につきて

嘉永六年開國後七十九年を經過せる昭和六年の今日
猶歐米崇拜熱のさめざるを歎きて

外つ國の筒袖衣これは我がよぼろ等の着る法^{はっ}
被^ひならずや

身にそはぬ外つ國衣着よそひて歩りくをとめ
のほこらしげなる

いたづらに外つ國まぬるためしかも絹高帽子
燕尾の服

ジャズバンド好む人等は英吉利の田舎あそび
と知らずやあるらむ

都にてはやるダンスと山里の秋の踊りといづ
れめでたき

外つ國をまぬる酒屋とありふるす繩ヒモ暖簾ノレンとは
何か異なる

配ツ偶キのあるをの子をみな抱きあひて狂ひ踊
るが開けたる世か

外つ國を慕ふ病ひの爲ならむあはれをとめの
髪縮れたる

外つ國の人の聲まね節真似て小唄うたふは泣
き叫ぶ如

パママと子等によばせて今めかす人を見
れば猿にかも似る

我が國の紀元をよそに西曆を用ゐてなどか年
數ふらむ

うしろ高き靴穿きて行くをとめ子のその足も
とのいたもあやふき

砥石なすアスファルト道ともすれば上滑りする世にもあるかな

ともすれば痘痕も笑窪と見ゆといふ迷ひ心のあさましの世や

事毎に異國まねて賢こぶる醜の物識多き世ぞ憂き

外つ國の高き家見て驚きて歸り來し人何か物言ふ

思ひ知れ外つ國人の我が國の着物きよそふその姿見て

事毎に外つ國まぬるおろかさを外つ國人の笑ふと知らずや

なかなか外つ國まぬる世の中におくるゝ身こそ誇りなりけれ

赤化運動と思想善導

家焼かば共に惱まむたぶれ男の知らでや庭に
火遊びをする

山を崩し川を埋めて平らけき國作らむと夢を
見る人

そが好む國へ行けかしこの國を惡しざまにい
ふねぢけ人等は

ねがはくば金剛力士に身をなして世のすね人
をひねり潰さむ

物申す共産主義者に刑務所とソグイエットロ
シヤといづれ住みよき

わが皇國ロシアの如くなりもせばいかにせむ
など思ふ事あり

眞夜中に鐵路かなぢつくるふ音聞きて事起りしと思
ひけるかな

利鎌とぎもてこれの醜草刈りそげよ田畑あまねく
はびこりやせむ

いかにせむ國の掟もあなづりて犯すを誇るね
ぢけ人等を

古への聖の書を取りいでて懐しみ見る世にも
あるかな

騒がしき世も静まらむ時來べし斯く思ひてぞ
我れと慰む

我國には赤化事件あり露國には反赤化事件あ
り世はさまざま

あるまじき事を思ひし彼も老いてふる里戀ふ
ときくがあらはれさ

天の下ゆきさまよひて北の國ロシヤの露とつ
ひに消えしか

同志に告ぐる思想轉向の理由書を見れば彼等
も日本人なり

我家を焼かば住みかに迷はむと心づきしかね
ぢけ人等も

コミンタンはソヴェエツトロシヤの機關ぞと
今まで知らぬ醜のおぞ人

あらぬ火の燃え廣がれど消つ術を知らぬ野守
に似たる大臣等

まがつ火はまだ消ゆべくも見えぬかな水打つ
人の聲はすれども

口に筆に道は説けども身を持ちて導く人のあ
らばこそあらめ

あとを行く人やまどはむ先立ちて導く人の道
知らぬ世は

旅人は行きまどふらむわかれ路のしるべする
人競ひ合ふ世は

生きて行く爲には人の物取るも罪なしといふ
人ぞ殖えゆく

當時の世相四首

我が業を怠りながら貧しさをいひ立て騒ぐ人
ぞ殖えゆく

世の相あひだいとも險しみこの夕べ追剥おぼぎ出でぬ都
大路に

ゆゝしかる事繁くしていましめの司の數のま
しもゆくかな

時事歌

政民兩黨大臣等の瀆職事件

昭和四年

山を見ずつまづくものは鹿を追ふさつをのみ
とも思ひしものを
世をのろふねぢけ人等と政事けがす大臣とい
づれゆゝしき

頃 大君の御心いかに政事けがす大臣の多きこの

共産黨事件豫審決定書公表被告の大部分が二十代の
青年なり

世を知らぬ若き心のあやまちと言ひ捨て難き
醜のたはわざ
善し悪しはさもあらばあれこの國の外に住む
べき國はあらじを

經濟恐慌につきて 昭和五年
多年の輸入超過米國の不況支那の銀貨暴落且濱口内
閣の金輸出解禁等の爲

商ひのさびれゆくさま知られけり日毎數ます
市の空家

この頃の市の人等の語り草世の淋しさの外な
かりけり

なかなか物持つよりは持たぬ身の心安さを
思ふこの頃

外つ國と相交らぬ昔への世の静けさを思ふこ
の頃

齒の値も米の價も安ければ田子や貢を納めか
ぬらむ

傳へ來し田畑を賣りて貢物をさむる田子もあ
りと言はずやも

誰にかは救ひ求めむおしなべて鄙も都も頼み
なき世は

救ひをば誰に求めむ國つ民頼まむ國もおとろ
へにけり

振り起せ生業難き世は殊に人に頼らぬ雄々し
心を

藥湯に身を養はむ旅立ちも心おかれつ事そぎ
の世は

國民の奢る心を戒むる司身をもて先づ示さなむ

いかにせむ買はむとすれど國つ物價は高く品悪しくして

國産使用奨励

身の爲にならぬ煙草と買ふ人の絶えなばいかに國といふ店

無くてもと買はずなりなば酒煙草賣る人惱むあやし世の中

一方^{ひと}を押せばこなたぞもち上がるごむ玉の如し人の世の中

今ぞ知る民の爲より身の爲を思ふ司の多きわが國

官吏の減俸反對運動

かの勤をよそに我が爲を謀るやからも國の司

り國民の鑑たるべき司ぞと思ふは古き心なりけ

うつせみの世に先立ちて憂ふべき身を忘れつつ何騒ぐらむ

當時の衆議院

飢ゑに泣く人かへり見ず政事謀る人等の何か争ふ

國の事謀る館に血を流し汚すやからの罪輕か
らず
政事罵る人もさびれたる世を救ふべき力なく
して

衆議院解散總選舉

いづれをかよしと定めむ山鳥聲も姿も同じか
りけり
鹿とると争ふ見れば臍に疵同じく持てる人の
みにして

東京驛にて總理大臣濱口雄幸佐郷屋留雄に狙撃せら
る

警官に護られながら大官の殺され易き國に我
が住む

犬養内閣成立 時に同氏七十七歳

長らふる證ある世ぞと祝ふらむ大きおとどと
なれる犬養
ひたすらに身を養はむ長らへばわが思ふ世に
あひもこそせめ

犬養内閣大臣等の伊勢神宮参拜につきて

昭和七年

美たらしの五十鈴の川にみそぎして心の塵も
流せとぞ思ふ

大前にぬかづくほどの心もてつくせおとど等
神のみ國に

井上準之助 團琢磨二氏白晝暗殺せらる

國人を護る掟も犬猫の出で入り易き庭の籬や

齋藤内閣成立 所謂非常時内閣

心して漕げや舟人風荒れて浪立ち騒ぐ大わた
の原

政友會の新總裁となりて大命の降下を期待せし鈴木
喜三郎を

家のあるじさこそくやしく思ふらめ待ちしみ
使門過ぎて行く

齋藤内閣に入閣せる政民兩黨大臣間の抗争につきて

かたわきて立ちなさわざそ乗合ひの小舟あや
ふく浪高くして

大森の川崎第百銀行支店に白晝三人組のピストル強
盗押入り三萬餘圓強奪逃走せり

外つ國の事のみ慕ふ我が國にギヤングをまぬ
る人さへに出づ

國際聯盟脱退につきて

いかならむさはりありとも我が國の行かでや
むべき道ならなくに

光榮の孤立を語る國人の聲に力の乏しきはな
ぞ

國際聯盟脱退に就きての御大詔を拜して

かしこしや事しげき世をふみわけて行くべき
道を君はのらしぬ

安田銀行岡山支店員を銃殺し金三萬五千圓盜取せし
巡查あり

世の中は荒びにけりな巡查にして人を殺して
物を奪ひし

滿洲移民

右に鉄左に銃を取り持ちて行くか若人滿洲の國へ

東郷元帥の國葬

昭和九年

ものゝふの鑑のみかは日の本の國の柱と仰がれし君

外つ國の人も惜しみぬ日の本の益良雄君がと
はの眠りを

岡田内閣成立

世の中の誰か思ひしこの人の首相おとどとならむと
誰か思ひし

二・二六事件

昭和十一年

歸順せる兵百餘名ありといふラヂオに心少し
落ちつく

二・二六事件首謀者香田大尉等十五名反亂罪により死
刑執行せらる

昭和十一年

斯くならむ先に腹切りいさぎよく詫ぶべかりしをおぞのつはもの

新議事堂の竣功式に参列して

眞玉なすこれの高殿寄り集ふ人の心もかゝらましかば

新議事堂の美しさを見て今一度我れ代議士になりたく思ふ

英國國王エドワード八世退位す

人妻を戀ふる心のひたぶるに王の位を捨てし人かも
王の位戀ゆる捨てし後悔いの時來たらすと我れは言はなく

伊太利のエチオピア征伐につきて

伊太利におびやかされてエチオピアを見すてし英吉利の衰へおもほゆ
敵國の旗をかゝげて敵兵の入城むかふるエチオピアの民

大將の林首相は辭職しぬ辭職するまで強がり
いひつゝ

亞歐聯絡飛行機神風號

雲を霧を風をしのごて我が飛行機翔りけらす
や一萬五千キロ
我が飛行機着きも着きたりロンドンに九十四
時間にて着きも着きたり

日英間飛行成功せし人よその飛行機を作りし
人よ
神風のかへりむかふとあつまれる人等山なす
大雨を冒して
亞歐連絡飛行成功の飛行士に拜謁賜はりし御
心かしこ
歡迎會に招ばれ來つれど挨拶の言葉に馴れぬ
飛行家ぞよき

何見せむ何振舞はむはるばると友邦の青年訪
ね來たれり

東京市自治功勞者表彰式に參列して

斯くばかり功勞者多き東京市その自治政の舉
がらざるや久し

チエコスロバキヤ崩壞

昭和十四年

コンドル機の強き羽風に崩れけり寄木細工な
すチエコスロバキヤ

國旗すでに取りおろされて人空し祖國終焉の
チエコ公使館

アルバニア國の滅亡

イタリイに國奪はれてグリークに逃げし王か
なアルバニアの王

學生御親閱

物學ぶ若き人等を殊更に集へみそなはすみ心
かしこ

その成功祈らるゝかな初めての我が飛行機の
世界一周

世界一周事なく終へて我が飛行機歸還の今日
の空晴れわたる

世界一周のかへりむかふる人々に交りて我れ
も小旗振りたり

飛行機もその操縦も外國に今は劣らずと思ふ
うれしさ

在外の同胞いたく喜びし報告きゝて涙零れぬ

歐洲戦争

頼みなき國をたのみて戦ひて國失ひしポーラ
ンド人はも

箱庭なす山水明媚の小公國あはれ鐵蹄に蹂躪
せられぬ

ルクセンブルグ

この上の犠牲出だすに忍びすと獨逸に屈せし
ベルギー王あはれ

降服の噂さは嘘と吃るがにあわて言ふあはれ
佛國大使館員

入城のドイツの兵にバタイ少女花束投げし記
事を見たりや

強かりしフランス脆くも敗れたるその原因を
思はざらめや

政黨の政權爭奪を事とせし國亡びたりフラン
スの國

祖國フランス脆くも獨逸に降服す泣きてやあ
らむ地下のジャンダーク

日毎夜毎空襲うけれど堪へ居るロンドン人に
學ぶ所あり

國民精神總動員につきて

笛ふけど國民踊らぬその故を思ひきはめよ時
は非常時

文字教へ繪を教ふるもまづ書きて手本示すが
常と知らずや

指導者は國民以上の安樂を求むなといふ獨逸
總統

昭和十五年十一月十日皇紀二千六百年奉祝のラヂオを聴きて

いでましの時にやなれる嚟と奏する国歌の軍樂聞え來

大式典參集したる五萬五千人の一齊に叫ぶ萬歳の聲

皇紀二千六百年奉祝の今日にあひて日本人わが誇り新たし

二つなき日の本の國に生れたる幸をこそ思へ今日つくづくと

天地のむたかぎりなく榮えゆく御代ことほがぬ民あらめやも

昭和十五年十一月廿九日帝國議會開設五十周年記念式典に參列して

ヤアヤアと挨拶かはす聲高し舊議員等の各控室

顔知れど名前忘れて挨拶に苦しみたるは我れのみならず

恙なくこの佳き日にぞあひにける友の多くはみまかりにけり

大君は御會釋賜ひぬ萬歳をわれら參列者唱へ
まつれば

式詞振り案外によし小山松壽衆議院議長とし
てももの馴れしかも

かにかくに永く勤むればほめらるゝものとは
知らに早くやめにき

多年勤續議員の表彰につきて

政治につきて

國民の輿論と言ふも政黨又は新聞の指導又は煽動に
よるものなれば二首

吹く風になびく民草みづからに音を立てつと
誰か誣^しふらむ

吹き誘ふ風のまにまに西東うちなびくらむ民
草あはれ

かたわきて司も民も言ひ界ふ世の政事誰か治めむ

政黨政治

228

青海原漕ぎゆくすべも知らずして先争ふか醜の舟子等

政權争奪

おのが田に水を引きつゝ國の事まことしやかに何語るらむ

政黨の地方遊説

幾度か繰り返すらむ政事同じ人々入りかはりつゝ

政黨内閣二首

しばしばに大臣變りて國民はその名覺ゆるひまもなきかな

政黨の政策いつか定まらむ調査の聲はきゝて久しき

盗人を捕へて後に繩なひし人の末かも我が大臣等は

亂れゆく世を救ふべき益良雄の出で來ば沓を取らむとぞ待つ

上に立つことこそ競へ國民を導ぶく人はなき世なりけり

戸を作り垣を築きて物取りの入るを防がむ國といふ家

軍備

229

正しきを常に守りて日の本の光りを放てみ使
の臣

傳へ來し田畑を賣りて代議士の椅子を買ひと
る里人あはれ

川上をおのれ濁して川下の水は澄むべきもの
と思ふか

威武に屈せず富貴に淫せぬ政治家の一人もあ
らぬ國に我れ住む

戦時今財政經濟に長じたる爲政者なしと思ふ
は悲し

閣取引取締る術なきものか司法大臣道德を説
く

平らかに物をおかねば鳴るといふ諺知るや今
の大^{カミ}臣^ト等

代議士彼自動車徵發せられたり自動車持つま
でに何時富めりけむ

木炭がはじめて議會の問題に上りし年よ昭和
十五年

戦時今民政黨はいとまあれや總裁はじめ碁に
ふけりつゝ

戦時今政友會はいとまあれや内輪もめにぞ日
をすぐしつゝ

滿洲事變 上海事變

家と思ふ子を戒めてみ軍にいそがせ立つる病
みこやす父

新妻を里にかへして戦の場へと急ぐあはれ益
良雄

み軍に出で立つ背子を勵ますと命を断ちし雄
雄し人妻

つはものは今か立つらむさ夜中の巷とよもす
萬歳の聲

老いぬれどみ許しあらば銃取りて我れも軍の
場に立たまし

み軍の費えのたしと貯へを半屋ひとやの人も國に捧
ぐる

産土うぶまの杜にひらめく日のみ旗軍の勝を祈るな
るらし

大方は勝つとは思へど新聞を手にとる度に心
をのゝく

昨日までいくさをしては人の國取りしイギリ
ス何かもの言ふ

國際聯盟の抗議三首

戦いくさひを何か好まむ昔より血の穢けがれ忌む神の我が
國

劍太刀とつ國人を鬼の如恐れし事は昔なりけ
り

益良雄の誰はあれども身を爆彈たけだまに岩砕きしこ
の三人はや

爆彈三勇士

歸り來し軍人をねぎらはむ送りし時の心忘
れず

益良雄は名をし惜しみて命たちぬ親と妻子を
後に残して

空閑少佐

祭られし益良武雄のその親か紋服着たるこの
田舎人

靖國神社臨時大祭

支那事變

ねぢけたる人の心をため直す術はあらしかむ
ちうたずして

軍服の姿雄々しも見なれたる八百屋男と思は
れなくに

我が町の花屋のわく子出で征きぬ兄は上海に
て傷うけしてふ

出征の願ひ叶ひしうれしさを言ひ來し人の忘
られなくに

裏町のこの小家にも召されゆく人あるらしも
み旗ひらめく

萬歳のこゑに送られ近衛師團立ち征く舗道秋
の日の照る

黙々と兵等たち征く部隊長は見送る人に舉手
の禮しつゝ

老人わがせめての勤め今日も又見送りてゆく
み軍人を

武運長久祈るとのみぞ我れは言ふ出征祝すと
人はいへども

召され征きし背子安かれと黒髪をさゝげて祈
る若き妻あはれ

紙につゝみ黒髪三つ四つさゝげあり武運長久
祈るとして

武運長久祈ると書きし大き旗官廳會社の窓に
掛けたり

戦ひに征けば生きては歸らぬと皆覺悟する國
は強しも

いづれをかわきてたゞへむ軍人勇しからぬ人
一人なし

戦ひに心落ちるぬや甥の手紙言とゝのはす字
遠ひもあり

これやこの形見ともならむ前線の甥の手紙は
おろそかにせじ

航空兵神酒^みを供へて飛行機に奮戦頼むと聞き
て涙す

飛行機の整備いそしむ人々の世に知られざる
いたつきを思ふ

假橋の柱となりて工兵は渡る歩兵をはげませ
りてふ

裸體にて銃をひつさげ川わたり岸の敵陣に打
ち入る兵はも

敵前の電柱にのぼり悠々と電線の修繕果せし
兵かな

身がはりに死にし馬ぞとねもごろに野菊手向
けてはふりたりてふ

戦地にて愛馬に會へる兵かなしわが食物を皆
與へけり

戦地にてもとの飼主にあへる馬その筒袖をく
はへ引きしてふ

数十倍の敵を防ぎて上海を護り通せる陸戦隊
はも

戦友の死骸をぞ焼く着け劔して見まもる兵等
涙こぼしつゝ

昔人生けるしるしありと歌ひ上げしきかゆる
御代にわれあへるかも

南京入城

おどかさば屈し服すと思ひけむ増上慢のイギ
リスアメリカ

九國會議

人の物奪ひ取りつゝ人の道説く人の國かイギ
リスの國

戦地にて年を迎ふと兵士等の餅搗きて居る寫
真なつかし

昭和十三年

昂奮か昨夜の眠りのたらはぬか出征者の眼血
走りて居り

長男の出征見送る母親の涙ぐみ居るを見ぬふ
りして居つ

家も身もかへり見なくに戦ひね日本男の子の
一人なる汝

親族の出征二首

召集令狀來りし夜は昂奮して寢られざりきて
ふ覺悟し居たれど

死亡しぬ出征者の妻死亡しぬ幼子四人を後に
残して

兵士等の戦死をたゞに名譽ぞと人の言ふ聞き
て腹立ちぬ我れ

白骨となりて歸り來此の驛より勇躍出征せし
姿目にあり

母に曳かれ戦死の父に焼香する幼子見れば涙
こぼるゝ

葬儀に列なりて二首

國の爲命捧げし益良雄がみ靈の前にぬかづく
我れは

出征の子よりの手紙讀む父の傍そばに座りて母は
きゝつゝ

父と妻に戦さの様を語るなり凱旋の兵は子を
抱きつゝ

陸軍の枚方ひらた火薬庫爆發すこは何事ぞ事變下に
して

支那地圖をひろげ見ながら戦ひの終らむ時の
はるけさを思ふ

嚴肅に舉手したるまゝ、義父にさへ凱旋將軍武
勳語らす

傷負ひし通信兵あはれその任務果すすなはち
息絶えにけり

通信犬歸り來にけり傷負ひて足引きづりつゝ
歸り來にけり

彈丸つきて敵の飛行機につき當り共に落ちた
るあはれ益良雄

海軍航空隊にその人ありと知られたる君討死
す誰か惜しまぬ

南郷大尉二首

家を建て妻も定まり居りしてふ益良雄あはれ
討死しにけり

十日にて百里へだたる敵の城を攻め取りしか
なや我がつはものは

廣東攻略

漢口一角先づ占領の喜びや部隊長の眼に光る
ものあり

漢口攻略六首

武漢三鎮攻略したる我が軍の勝鬨の聲聞ゆる
如し

入港せる我が軍艦の君が代の喇叭ぞひびく漢
口の空に

家毎に國旗かゝげぬ夜ながら漢口全部占領の
ニユース

聞きなれし愛國行進曲も今宵きけばいや勇し
く聞ゆるものか

負け惜しみ言はゞ言はなむ蔣介石支那の中原
我が手に歸したり

恐ろしき戦争も見馴れ聞き馴れて人は平氣に
なりゆくものか

み軍に勳を立てゝ我が罪を償はむとせし心あ
はれなり

赤の闘士某の戦死

永遠の東洋平和建設の礎となりし人ををろが
む

靖國神社臨時大祭二首

境内に居並ぶ兵士の遺族等を御目にとめつゝ
通らせ給ふ

舉國一致堅忍持久と書きし旗官廳會社の窓に
ひらめく

昭和十四年

大きな支那平げむ戦ひのとく片づくと誰か思
へる

奥州を平定するに十二ヶ年かゝりし昔をしの
ぶこの頃

日章旗四百餘州にひるがへる時をこそまで銃
後守りつゝ

み軍に吾子は召されて家守るは、その君よま
さきくありこそ

某知人へ

凱旋の父を忘れて母の胸に顔かくしゐる幼子
あはれ

仙頭を占領したる今日のニユース六月の暑さ
忘れ喜ぶ

命かけて我れ等にかはり仇を撃つ人の門出を
見送らざらめや

凱旋の君を迎へていくさ話しきく時のみを待
ち居たりしを

知人の英靈を迎へて

戦死せし知人の遺骨しづしづと運ばれ來るは
見るにえたはず

行きあひて話し聞きたし四年間北滿守りし話
し聞きたし

再び戦地に赴く男へ四首

行きあひて祝ひ言ひたし少尉より大尉に進み
し祝ひ言ひたし

行きあひて話し聞きたし北支那に奮闘したる
話し聞きたし

行きあひて顔見て置きたし戦線へ再び赴く顔
見て置きたし

迫り来る戦車術なく肉弾もて應戦したる兵士
を思ふ

ノモンハン戦二首

ノモンハンその名聞く毎髯髯と一萬八千の死
傷者眼に見ゆ

北滿警備に二ヶ年過ぐせる我が甥の馬上の姿
落ちつきてよし

寫眞を贈られて

戦死者の遺族の家やいかならむ新盆の日は近
づきにけり

二年間戦ひたれど武運強く生きて還りし我が
友の子よ

敵機十一撃ち落したる空の勇士篠原弘道の名
をば忘れず

祝詞の聲鎮めの軍樂響くなり森殿静寂の夜は
の境内

靖國神社臨時大祭四首

御羽車通らす暗の道の邊にひざまづく遺族三
萬の嗚咽

織る如し詣で来る人歸る人空には花火の鳴り
響きつゝ

招魂式に招かれて來し田舎人見れば涙のこぼるゝものを

國の爲諦め居るらし出征の子の事語らぬ我が妹は

昭和十五年

武運強く生還せよとぞ祈らるゝ故里の家繼ぐべき貞夫

勇生斷斷生智と言ひやりぬ甥の氣質を知る叔父我れは

歸還命令下りて近く歸り來む貞夫の手紙を繰り返し讀む

歸還命令下りて歸國する貞夫その嬉しさを言ひおこせけり

二年有餘住みし滿洲に別るゝはつらくもありと書きそへてあり

戦死せし吾子を惜しみて嚴かにはふり營む父は老いたり

戦死者の父某へ二首

靖國の神とみ靈はまつられむ屍は支那の土と果つとも

出征の親族いづれも恙なく聖戦四年目の夏は來にけり

味悪くかつ食^はみにくき外米をよく噛みながら
戦争を思ふ

マツチ砂糖配給施行につきて思ふ戦さてふも
のゝ影響の遍ねさ

行樂の人出二百萬てふ新聞記事出征兵士はい
かに讀むらむ

調はぬ俄か作りの法令に國民苦しむこれや非
常時

宮様の無言のおん凱旋迎へまつる帝都七百萬
人の暗涙

北白川宮

塔列兵二萬六千の行進や空には飛行機二百五
十臺

親兵式二首

歩武堂々各種部隊の行進に馬上の陛下舉手を
賜はる

かしこしや演習なれども防空の高射砲据うる
宮城外苑

防空演習六首

防空演習始まりし今日の空曇り飛行機の音轟
き渡る

雨の夜の街にぞ響く演習の飛行機の音銃砲の
音

帝都防空演習の夜につけこみて物盗む人もあ
ればあるものか

防空演習しばしばすれば落着きの見えて頼も
し我が町人等

大東亞戦争

年老いて家にこもらひ居る身にもひしひしと
感ず時局の切迫

東條中將首相の大任を拜受しぬ昭和の時宗た
れとぞ祈る

経済封鎖は武力以上の迫害といふ東條首相の
言ぞ正しき

對米英宣戰布告せられたり昭和十六年十二月
八日

事ここに至れば戦ふ外なしと宣らし給ふに涙
すわれは

いやさかのみ國のゆくて立ちふさぐ醜のえみ
し等うちてしやまむ

戦ひは今日からにして幸先よし英砲艦の撃沈
米砲艦の降服

上海にて

嬉しくて嬉しくて我れ涙しぬ打倒米英戦劈頭
の大勝

ハワイ沖マレー沖海戦

誇大狂ルーズヴェルトの顔やいかに米國太平
洋艦隊の全滅

敗報に驚き椅子より落ちきといふルーズヴェ
ルトよ怪我せざりしか

隠忍自重多年壓迫をしのびこし日本民族の反
撥力を見よ

劈頭戦大勝得たる報ぞよき國民の勇氣百倍せ
るかな

いくさ勝ちし知らせうくれれば老いが身も心い
さみて若やぐものか

抱きもつ魚雷と共に敵艦に體當りせし兵に鳴咽す

雨霰とふりくる彈丸もさはりなく敵艦爆破す
これぞ神業

百年間東洋侵略の牙城たる英領香港はわが手に歸せり

昭和十六年十二月廿五日

ユニオンジャック取り拂はれて日章旗高くひるがへる香港政廳

見も知らぬ家に立ちよりラヂオきゝぬシンガポール戰の經過知るべく

シンガポール無條件降服のニュースききて思はず手を拍ち萬歳さけびぬ

昭和十七年二月十五日

勝報をよろこびききつつ合掌す我が軍戰死者三千二百八十三名

昭南島と名もあらためてシンガポール大東亞共榮圏の一基地となりぬ

ジャワ島攻略俘虜八萬二千六百十八名時維れ
昭和十七年三月九日

たのみなき米英たのみし和蘭の悔いは及ばす
すでに亡國

本國も領土も今は失ひて他國にさまよふ和蘭の女王

天兵といはゞいふべし花なして敵の地上に落下する部隊

米英蘭の飛行機の猛射かへり見ずパレンバン占領したる落下傘部隊

英國をうらむあまりに皇軍をよろこびむかふるビルマ人あはれ

色形われに同じと皇軍をよろこびむかふる土人等あはれ

俘虜五萬鹵獲重火砲二百門バターアン半島完全の占領

待ちにまちしコレヒドールの陥落に思はず妻も萬歳さけびぬ

ヒリツピン攻略成りし今思ふ福本日南と中村彌六

大本營の發表あればまちくれといふに待ちをりよろこび待ちをり

まちをれば軍樂先づもとゞろきて特殊潜航艇大戦果のニュース

マダガスカル島沖海戦

皇軍がアリュエーション方面に活動する今にして思ひおこす間宮林藏を

日本の武士道を見よ敵兵の死骸埋めて十字架を立つ

皇軍は科戸の風かゆくところ草木の如く人等なびがふ

たのもしや艦隊司令長官の沈着の態度素朴の容貌

山本聯合艦隊司令長官の寫眞を見て

支那露西亞獨逸と戦ひ曾て勝ちし日本は今や米英に勝つ

我が國が勝ちしときけばスポーツさへうれしきものを大東亞戦争

この感激この興奮を心境の一時の過程に終らしむなゆめ

わが領土俄かに廣くなりたるに百年一日に過ぎし思ひす

大戦果につきて三首

小川より大海原にこぎ出でし船さながらや世ぞ展けたる

突然と大きな家屋に移住して心何となく落ち居ぬ思ひ

この大戦勝つべく言上したりけむ軍當局の果
断に驚く

よくもかゝる大戦争開始せし軍當局の果断
に驚く

大東亞戦の準備の周到規模の廣大に驚きて二首

人のあと踏みゆく外に道ぞなきわれぞまさし
く世におくれたる

チャールズもルーズヴェルトも案外の愚物な
りしよ今にし思へば

惻巧らしきおぞの動物人間はゞ人間なりとわ
れは答へむ

飛行機の大き戦果をきゝつゝも全部歸還すと
いふに安堵す

九勇士高き偉勳の報道をわれは泣きつゝ聞き
居たりけり

昭和十七年三月六日

その智謀その沈勇ぞすばらしきうべ上聞に達
せられしてふ

九勇士

謹しみて不朽の偉勳を欽仰し勇士の英靈にぬ
かつくわれは

九勇士葬儀

ソロモン海戦大勝のニュースすがすがし曇り
むし暑き今日のひるすぎ

海軍の珊瑚島沖の大戦果のラヂオぞひやく新
緑の街

天の下最強國となりたる御代を讃へむよき
歌もかな

健やけき我が身の幸ぞ大稜威四方にかゝよふ
御代にあひたる

長らふるかひぞありける東亞より米英うちや
らふ御代にあひたる

亡き親になきうからにも分ちたしこの大御代
にあへるよろこび

今にして歐米人等の跋扈せし治外法權時代お
もほゆ

いくさするその度毎にのびてゆく國はわが國
正しわが國

かくばかりかゞやく御代に思ひきや生き長ら
へて我れあはむとは

七十五年長らへて會ひぬ日清日露日獨戦争大
東亞戦争

神つ國日の本つ國の大君は八紘一字を國是と
したまふ

聖天子肇めたまひし日本にっぽんの國是は世界の平和
と知らずや

ひんがしの亞細亞のやから仰ぎ居む眞日とか
がやくすめら大みいづ

くらげなす八十島つくりかためます神のみ業
を正目にし見つ

綱かけて四方の島々引きよする神ながらなる
神のみ業ぞ

わが海軍大西洋に進出すニユーヨーク攻撃の
時をこそまで

世界各國大廻轉の樞軸なすわが帝國の偉容儼
たり

日本は世界第一の強國と裏書きしたる米英の
二國

勇しき愛國行進曲の聞きのよき心はすみて躍
り出でむとす

日泰攻守同盟成立す打倒米英戦開始十四日目
の今日

昭和十六年十二月廿一日

戦勝にゑふなと人にいふ人のおのれゑへるや
聲のあらだつ

戦ひは勝たねばならぬ負けし時のみじめおもへば勝たねばならぬ

初いくさ勝ちてうれしも敗戦の場合想へば身の毛いよだつ

前線銃後一致協力仕遂げてむ興亞は日本の使命の事業ぞ

戦勝をよろこぶやがて敗戦の場合想ひ見るわが性かなし

大戦争断行し得ず首相辭せし近衛文麿あはれむわれは

見出しのみ見るに止めつ皇軍の苦戦の記事は讀むにえたへず

十年後か二十年後かこの大戦終らむ時を誰も知らなく

見おくりの好意を謝して奮闘をちかふ青年顔赤みたり

見おくらるゝいとひてひそかに入營せし青年ありき思へばあはれ

新婚早々再び召されし甥の事折りにふれては妻と語らふ

勝ちつゞく國に生れし身の幸を友と語るや喜劇見つゝも

戦時今幸と思はむ芝居を見角力をも見つ時折りなれど

粗末ながら食物もあり戦時今住む家もありたらへりといはむ

莫産敷きて子等は道邊に遊びをり戦勝國の街の静けさ

誰指圖するともなしに日章旗家毎に立てり奉戴日今日を

戦争は發明の母か團栗もてアルコール造る技術者いでたり

四勇士の忠靈むかへて人ならば寫眞と記事とを謹しみて見る

濠洲シドニー攻撃特殊潜航艇の英靈横濱港着

敵將も武勇たゞへし四勇士の今日の歸還ぞむかへざらめや

忠靈塔建設工事に奉仕すと土運びをり府知事と市長

國の爲收入思はず働けとさとせる母は職工の母

戦時今待遇うすきを潰職の口實とする官吏あらすな

雑談にはた喫煙に時つぶす官吏あらしむな大戦下の今

戦時今威張るを役得と心得居る官吏軍人あらしむべからず

着物要らず食物豊富の南洋にうつり住みたくまじめに思ふ

大熊を捕りて熊汁作り吸ひし兵士の記事をおもしろみ讀む

心せよ他國煽てゝ利用する事に長けたる英國のやりくち

政權武權截然分離すべしといふ軍司令官の訓示見たりや

飯田司令官の訓示二首

政權と分離せざれば軍隊は憎まれものになるといふかも

たぐひなき世界の聖雄とわが思ふ翁ガンヂーよまさきくてあれ

欺瞞何威壓が何ぞビルマ離れ印度も英より離れむとする

英國にこゝろ服せぬ印度兵續々投降するとき
かすや

米國飛行機日本各地を空襲すいつはらすいへ
ば驚きにけり

昭和十七年四月十八日

皇室は御安泰とのラヂオきゝて市内各所の被
害を思ふ

國民に戦争樂觀せしめたるフランス國の末路
を見すや

長崎丸沈没の記事讀みゆけばわが機雷にし觸
れての沈没

長崎丸沈没せしめし責負ひて腹切りしてふ船
長菅氏は

上京せし戦死者の老母トラックにはじかれ死
にきあはれなるかな

靖國神社臨時大祭

おのおのおのおのが職業はげむ外戦に勝つ道
のあらめや
食物と娛樂をまづと與ふるが民を治むる道と
知らすや

聞取引する人達も戰場に立たば同じく勇名揚
げむを

人間は多角多面のものなりと知らぬ人等の何の談論

利己心を捨てよといふか捨てがたみヒトラーもなやむその利己心を

七十歳以上の人を殺し食む蕃族の記事を苦笑しつゝ讀む

殺されて食まれてあらむ五年前ビルマワノ族の人ならばわれ

公園の鐵柵木柵とかはりたりあまねきかなや戦争の影響

外地へも侍從御差遣かしこしや戦時の民情視察せさすべく

東條首相の民情視察をきゝて思ふ地方官等は何してをらむか

多く言ひ多く行ふ人なるかかくしあれとぞ首相に望む

民の聲は神の聲なり大臣も又軍人も謹しみて聴け

貯蓄演説藏相のみか海陸の大臣もする戦時なるかなや

「正直者に馬鹿を見さすな」この建議東條首相
はメモに留めしか

第三回中央協力會々議三首

行列買悪るしとは言へせねばならぬ女子の勞
苦を察せよといふ
大臣等聽き放しにすな協力會員の熱意籠れる
質疑要望
敵を知りおのれをしるが戦勝の道と孫子はい
ひにけらすや
思慮淺く人の煽てに乗り易きヤンキー共ぞと
しりて置かなむ

名譽望み冒險好む國民と知りておかなむアメ
リカ人を

相手方弱しと見ればつけあがるアメリカ人と
知りておかなむ

有色の人種われらを下等視するヤンキー共ぞ
と知りておかなむ

戦へる國と覚えす將棋さし碁うつ俱樂部の賑
ふ見れば

戦へる國と覚えす美術展見に来る人の多きを
見れば

鹵獲せる米英機もて靖國の宮詣うでする空の
益良雄

靖國神社臨時大祭

286

戦場に立てば強しもならず者も一利一害の世
にこそありけれ

青年等風寒き夜に訓練をきほふを見れば涙ぐ
ましも

個人主義の米國民も一致して戦争につくす記
事を見たりや

靖國の神とし君はまつられぬたくましき姿今
も目にあり

闇取引處罰せられし女子多し時は戦時の英國
の女子

物資不足人手不足を克服する國ぞすれたち勝
ちとげむ國

米英打破の大詔喚發せられたる去年の今月今
日今朝

大東亞戦一周年三首

連勝をよろこび祝び犠牲者をいたみ悲しみ一
年すぐしぬ

長期戦の覺悟あらたに生活の簡素化徹底をち
かふ國民

287

婚約者召集令受けて披露日の繰り上げられぬ
戦時なるかな

安藤彪雄氏令嬢結婚に付三首

みいくさに召されし人もその親もよろこび祝
ふ國はわが國

みいくさに子の召されしをわが家のほまれと
祝ふ國はわが國

新世帯つくる間もなく再召集うけしわが甥よ
武運めでたかれ

身一つの事など思ふ時ならずといふは講演の
營業者にして

對ソ戦誤算ありしと國民にいふヒトラ一の率
直ぞよき

国防獻金百七十三圓横領す下谷區坂本警察の
巡查

かはりたり商人の前に手をすりて物買ふまで
に世はかはりたり

彈丸となり銃ともなりて勳立てよ今日召され
ゆくこれら金物

十年あまり使ひなれたる火鉢なり人に別るる
悲しさ覺ゆ

口先にはた筆先に命をばさゝぐるといふ人のときめく

世界地圖見ながら白人の横暴を憎みこし我れよ五十年間

コレラ豚の肉を賣りたる肉屋あり時は戦時のわが國にして

身を捨ててみ國をまもる人思へば重き貢も重からなくに

非常時の大政翼賛に適當の代議士出でよ改選期近づく

代議士改選二十首

非推薦候補の演説中止にあふを見て藩閥政府の壓制憶ひ出づ

元書生の當選いかにと刻々の選舉特報に注意しつゝあり

被推薦者と見しらぬ人にも投票するこの國民のすなほなるかな

棄権者は理由届出でよと役人のいふにおびえて投票せし人々

落選すればよしと思ひし人落ちて心ひそかに快哉さけびぬ

當選すればよしと思ひしわが知人當選したり
賀状を發す

大臣となりし人にて落選せしためしつくりぬ
俵孫一

濱職の前科者をば代議士に選出したり東京市
民

上海のパーのあるじを代議士に選出したり東
京市民

書き易き氏名の候補に投票せし選舉者ありき
てふ東京市民

福家てふ候補者の苗字めでたしと投票したる
東京市民あり

國體研究この頃やうやう始めたる代議士もあ
り新衆議院

流言蜚語の嫌疑を受けて檢舉されし代議士も
あり新衆議院

機密漏洩の嫌疑をうけて檢舉されし代議士も
あり新衆議院

選舉人買收せしとて起訴せられし代議士數名
あり新衆議院

軍人と官公吏との古手多し強力はこる新衆議院

威武に屈せず富貴に淫せぬ代議士の幾人あらむか新衆議院

右翼派より議員辭職を迫られし尾崎行雄の晩年悲し

尾崎氏のこし方を思ひ今を思ひ世相の變遷のはげしきを思ふ

大臣等の演説喝采を事とする議員の歳費は三千圓也

第八十議會

將兵の勞苦をいひて國民に暴政強ふる爲政者あらずな

大御名を濫用なせそ國民を壓迫せむ爲濫用なせそ

東京市長にホヌをたのみてなり得てし留次郎が説く選舉の刷新

市會議員改選

戰爭におびえつゝけて各國民神經病者となり果てむとす

賄賂とりて闇取引を見のがし、警官の氏名新聞に出づ

ほめられてもわきまへのなき馬の勳ほむる人
等の心あはれむ

白人恐るゝに足らずと亞細亞人思ひつきたる
日露戦かも

日露戦記念日

徴兵令施行せられむとす朝鮮に内地と合併後
三十三年目

配給吏員不正働きて三十三名が死刑となりぬ
戦時の英國

戦前の良民が泥棒に轉業すといふは戦時の英
國の新聞

新領土見る機會なく死にゆくが心残りといは
ばいふべし

應召の町人見おくる今日寒し空には哨戒機
はげしき爆音

大き勳しばしば立てし益良雄の遂に討死しつ
る知らせや

加藤中佐三首

部下を愛し功を誇らぬ加藤中佐まこと軍人の
模範たりけり

君に忠親に孝なる加藤中佐日本軍人の龜鑑た
りけり

かくれんぼして居る思ひ家人と防空室にこもる練習

防空室四首

298

實際の時はいかにと思ひつゝ、防空室にこもりて居るも

防空室検査まちをれば検査員たゞ玄關に立ちよりしのみ

防空室検査終りて安堵しぬあだかも今宵は仲秋の月

刑務所の物ぬすみたる看守あり時は戦時の府中刑務所

囚人を手先につかひて刑務所の物ぬすむ看守ある世なりけり

聲ふるはし泣き叫ぶがに唄うたふこの氣障男早く死ねかし

外つ國まね聲ふるはして唄うたふこのうたひめに米を食はすな

國舉り戦ふ時しいえがたき病に籠るわれは苦しき

岸本大將東京市長となりにけり軍人旺盛の戦時なるかなや

299

大東亞築き上げむの困苦なりしのばざらめや
いかなる困苦も
聴き終へて馬鹿馬鹿しくぞいつも思ふ内容空
虚の名士の講演
み軍の勝祈らすと神風の伊勢へ行きます今日
のかしこさ
昭和十七年十二月十二日
長期戦おのづとゆるぶ人心取締るべき司人も
が

祝歌

礎は石をもちてぞ疊むべき黄金白金何はあり
とも
多年第一銀行に在勤せる石井健吾氏の頭取就任賀
えらばれてみ階近くに植ゑられし一木の松の
影の木高さ
法學博士男爵一木喜徳郎氏樞密院議長就任賀
君に待つ事ぞ多かるともすれば國の大臣も裁
かるゝ世は
法學博士林頼三郎氏検事總長就任賀

國の爲命をかけて盡すてふ大臣きざどの君が言の葉
ぞよき

同氏司法大臣就任賀

お祝ひの歌よみあへぬ我れはたゞお目出度う
とぞ謹しみ申す

彌富破摩雄先生の勅任并進賀

身につもる年も忘れてひたすらに君は盡しぬ
世の道の爲
弘道會長として二十五年間勤續せる徳川達孝伯を祝ひて
人の道弘むる心一筋にいつ四十年を君すぐし
けむ
弘道會顧問として四十年間勤續せる松平直亮伯を祝ひて

君つひに帝大總長となりにけり篤學の君謹嚴
の君

篠田治策氏京城大學總長就任賀

みどり子にかへるときは古りしかど君こそ
は世に老いせざりけれ

還曆賀

世に稀れのよはひといふはたはぶれか五十年い
とも見えぬ面ざしにして

七十賀

百枝千枝茂り榮ゆく老松によそへ祝はむ君が
齡を

八十賀二首

寶もち子寶もちて君は世に老いぬ薬もひめも
たるらし

つゝがなく瑞穂の國に長らへて米てふ齡君重
ねたり

八十八賀

稀れといふ齡の上に二十年はたとせを重ねてなほも健
けき君 九十賀

菊の花匂ふ盃いたゞきて八千代を君は手に持
たりけり

養老盃拜受の橋本善吉翁を祝ひて

初子得たる人のよろこびいかならむまして男
のこ子くはし男のこ子 十年振にて男子を得たる西村藤雄氏へ

よろこびて祝はざらめや背の君も女の君も我
がかねて知る人

村野次郎氏結婚賀

悼歌

我れは弟君ケイはこのかみたづさはり相うるはし
みありへしものを 入江祝衛氏

讀み果てすあなと叫びぬ黒梓の文のはじめの
友の名を見て 歌友某氏

「雲水の旅をいそぐや星月夜」いひすてゝいづ
こ我が友半山

うるはしき妻子と共につつがなくありと思ひ
し君はいづこそ

知人の頓死三首

ひぐらしの里へとさして我が友のひつぎの車
今ぞゆくなる

會ふ度にいとにこやかに物言ひしおもかげの
みをかたみとはせむ

十年にも足らずてうせしかなし子の何賢しく
も世に生れけむ

赤松元治三首

打ちそろひ生ひ立つと見し若松の一木枯れた
る庭の淋しさ

失せし子を惜しむあまりにわりなくも薬師を
かこつ親心かな

同じ齡同じ學屋同じ業久に睦びし友は去にけ
り

瓦斯窒息にて死亡せる花井卓三氏二首

かしこくて物なほざりにせぬ人もなほあやま
ちのある世なりけり

長らは大臣たるべき我が友と思ひしものを
はかなかりけり

樺瀨軍之佐氏二首

君と我れ熱海ホテルにゆきあひて世語せしは
去年の春なり

年老いて心静かに暮さむと常にいひしをあは
れ我が友

奥田直次氏二首

通夜僧の經よむ聲の聞えくる庭淋しらにこほ
ろぎなくも

さきをと年書きて貫ひし短冊の今は形見とな
りにけるはや

坪内博士三首

劇通の君の批評を聞きながら芝居を見たる事
もありしを

高島屋音羽屋よりも成田屋を最負にしけり劇
通の君

事毎にまさばまさばと思ひつつ十まり七の手
を經しかな

角田眞平先生十七回忌

君と我れ兄弟はらの如睦かびあひぬ政治上にては敵
對しなから

齋藤次郎氏二十年祭五首

君も當選僕も當選と仙臺より電報おこせし君
を忘れず

むつまじく二十九年間交はりぬ酒好む君酒飲
まぬ我れ

紙入れは我れに預くるが常なりき君存分に酒
を飲む時

酒飲の我に位は窮屈と君返上す秘書官辭職後
何事も打ち明け語る我が友の一人なりしを君
は死にたり

三浦大五郎氏二首

うれしきも又悲しきも我が事は人に言はざる
君なりしかな

わる口を言ひつつ人に好かれたる友偲びつつ
三年となりぬ

同氏三年忌二首

世の事に深く通じて聞き上手話上手の人なり
きはや

年まねく睦び來りて事しあれば助け合ひつる
間なりしを

窪谷逸次郎氏二首

我れ死なば葬式の世話して呉れむ人なりける
をはかな世の中

君と我れ師範學校に學びしより五十六年間親
しみ來つるを

石川雄之助氏二首

世の中を思ひ離れて老いの身をひたいたはれ
と君に言ひしを

黒梓の通知悲しも五十年餘睦びし同郷同業の
友

福田文一氏三首

我れはかく健康なりと腕まくり我れに見せし
は近頃なりしを

健康を誇りし友もたふれけり老いは淋しきもの
にぞありける

法螺吹きてふきあてにける男よと松田源治を
笑ひつつ偲ぶ

松田源治氏一周忌

東洋一の南畫家如翁死亡すとふラヂオを聞き
て君をこそ思へ

野澤如洋氏

頭腦明断温厚篤實の聞こえある實業家君が逝
去は悲し

中村萬藏氏

後繼がむかしこき吾子を先立てし人なぐさめ
む言葉しらなく

津田五郎氏の長男の死亡

普通選舉つとに唱へし君が名はかき残されむ
憲政史上に

中村太八郎氏

悲しさを思ひこそやれ年老いて妻先立てし君
が悲しき

藏原惟郭氏夫人の死

親切の人なりしかな記憶よき人なりしかな歌
人君は

歌友平井卯之助氏二首

をりをりに訪ひとはれつつ語り合ひ歌詠みあ
へる友なりしはや

歌の友の告別式より歸り來てかたみの色紙と
り出でて見つ

森田義郎氏

上京して初めて草鞋の紐解きしは我が家なり
しよ嗚呼長島君

長島隆二氏二首

縣人中たぐひ少なき才人の君長逝す惜しまざ
らめや

元侍従長徳川伯爵みまかりぬ四十年近き知り
合なりしを

伯爵徳川逸孝氏薨去四首

平民的にて温厚篤實の人なりき十六代將軍の
令弟の君

公爵徳川家達閣下に文字書きてもらひし事あ
り君の紹介にて

わすれずよ市會議員にわがなる時いつも親切
に世話しくれし君

七十年間憲政の爲につくしてし人の逝去を誰
か惜しまぬ

貴族院議員加藤政之助氏

六十とせの間親しく交はりて齡もおなじ友な
りしもの

判事木戸梅藏氏三首

相撲を見芝居を見しもいくたびぞかたみに誘
ひさそはれにつつ

やがてわれもあとを追ふべき身なれども友に
別るる今日ぞ悲しき

歌にかかはる歌

一筋と思ひ入りしをやちまたに分れて迷ふ敷
島の道

ことの葉の道のちまたに迷ふらむ老人ひとり
かゆきかくゆく

古き道新しき道人毎に思ひ異なることの葉の
道

人鷹もはた赤人もわがごとやはじめのほどは
詠みなづみけむ

團子屋の團子丸むるを見つつ思ふ歌もたやす
く斯く詠み得てむ

しかすがに誰もたやすく詠み得なば歌ははえ
なきものとならまし

子の如く我が詠み歌をいつくしみそだてもゆ
くか子持たぬ我れは

歌人の耳に入れずば何となく心落ち居ぬおの
が歌かな

願はくば歌詠み馴れて歌ひつつ越えてをゆか
む死出の山路も

繪だくみの筆投げしてふこの山を歌人君はい
かにうたはむ

斯くばかり騒がしき世を治まれる世ともうた
ふが歌のならひか

なりはひとなればつらきか歌よみにななりそ
ねといふ寄人某

奉りしその歌ゆゑに大奥に仕へし人の名をば
忘れず

歌よみはすべて人よきものなりと想ひしわれ
の迂濶を嗤ふ

せめて我が歌のむしろにある間だにうき世の
事を見聞かずもがな

ある歌會にて

君が名は終に歌壇にあらはれぬ袋にありし錐
の如くに

たどりたどり既に十年を過ぐしけり行きつく
時は何時かこの道

柄になく歌を作りて十年あまり過ぎしといは
ば人笑はむか

何ならぬ歌作るより田作れと昔の人はいひに
けらすや

歌人の歌集刊行の祝賀會讚辭と皮肉と諧謔の
雑音

歌集刊行祝賀會五首

行きあふややがてわかりぬ寫眞にてかねて顔
知る佐々木信綱

名の高き歌人と覺えず稿脊廣ノ一ネクタイの
窪田の空穂

和歌よりも新體詩向きと思ひけり土岐善麿の
モーニング姿

新ローマンス唱ふる人とうなづきぬ岡野直七
郎の身形人柄

もらひたる返禮心こめて我れ丁寧に讀みぬ君
が歌集を

村野次郎氏より歌集を贈られて

くりかへし讀みてを見たり我れもかつて行き
し事あるニユーヨークの歌

君が歌集讀み終へて思ふおしなべて克明の歌
調べよき歌

佳きが中にいやよき歌やアイヌ部落訪ひ行き
し歌鹽釜の歌

今井嘉幸氏より旅行百首を贈られて

普通選舉共に唱へし君と我れ今は歌詠む友と
なりにけり

風景よりも身邊の歌時事の歌多き歌集をよろ
こびて見る

割田斧二氏より歌集を贈られて

君が氣質君が生活あらはなる君が歌集は見る
に親しき

君が歌集見てよろこびぬ君が思想大方我れに
同じかりけり

我が歌を後に残すと人麿は何時かは石にきざ
みて置きし

歌人の作り歌多きを見てぞ思ふ古の歌もかか
りしものか

おのづから斯くも心地よくなるものか氣に入
る歌の成りしその日は

召し給ふ大御心をかしこみて詠み上ぐるかな
新年の歌

枯木をも山のしげみに交れりと拙き歌も詠み
上ぐるかな

歌も又人の如くに位山のぼればよくも見ゆる
なりけり

選歌につきて

あらあらしく雨戸をしむるはしためのうとま
しきかな歌思ふ時

人間萬事皆歌題なり詠みこなす力乏しきがわ
がうらみなり

人の歌そのよしあしを見分けうるまでは未だ
しきわが歌力はや

ひろひ物したる思ひす案外に佳き歌多き歌集
よみつ

未知の人君が長遊を謹弔す歌につながる縁者
として我れ

人の歌くさしこそすれさて詠むとすればそれ
まで詠み得ぬものを

同縣の知人の娘のこの歌集よみつぎてうれし
よき歌多し

その歌の萬葉集にのりてある古里人の名をし
忘れず

役者ならば尾上松助言の葉に飾りけのなき歌
人君は

昭和十八年八月廿日印刷
昭和十八年九月一日發行 **【非賣品】**

歌集 心境

著作
發行者

東京都芝區佐久間町一ノ五二
黑須龍太郎

印刷者

東京都京橋區新富町三ノ二
濱野治男
(東京二一四八八)

印刷所

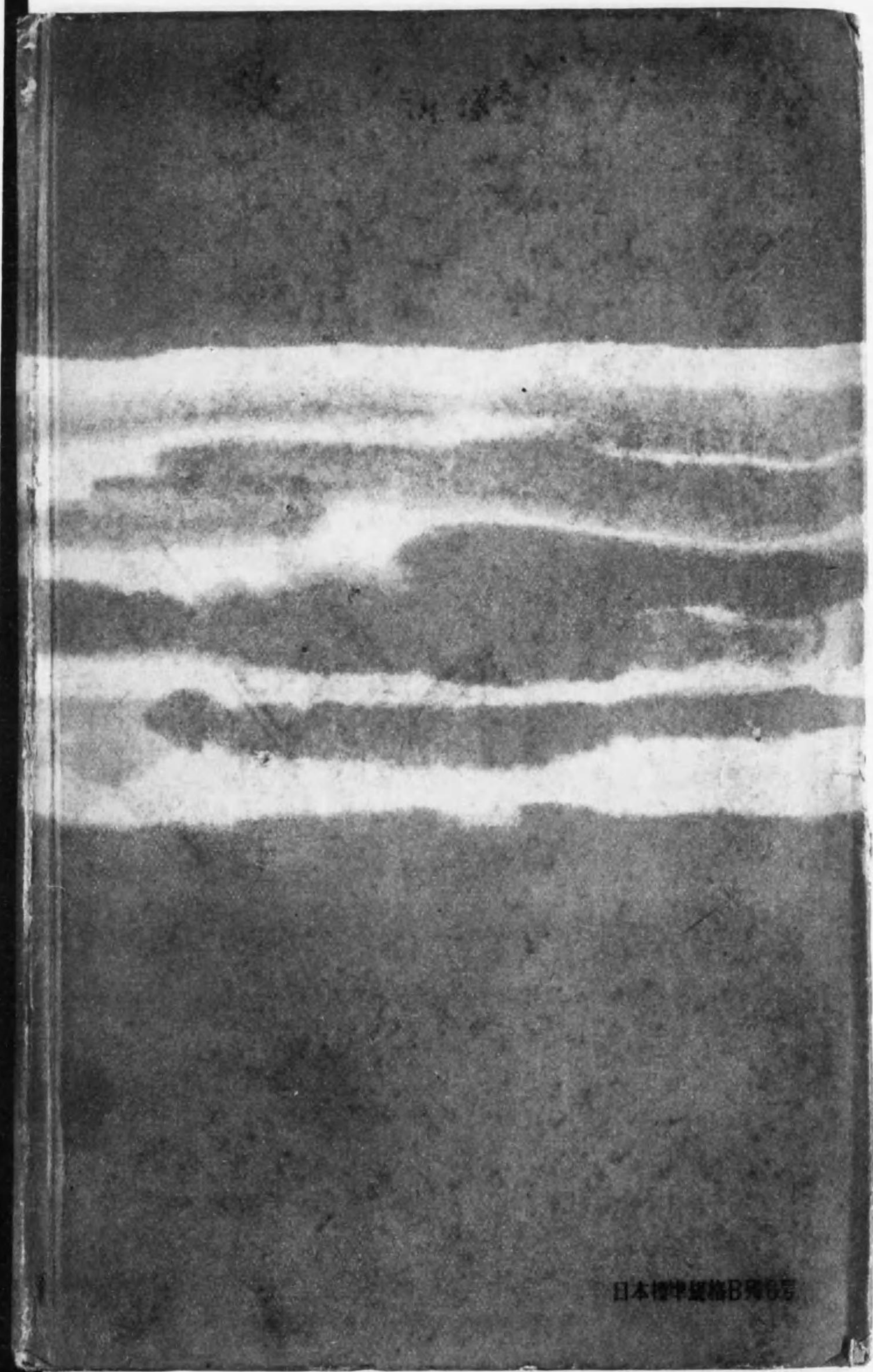
東京都京橋區新富町三ノ二
濱野印刷所
電話號碼(55)〇三九二

發行所

東京都芝區佐久間町一ノ五二
黑須龍太郎

984
E
112

終



日本標準規格B列B号